

# 万葉集 3743 番歌と 3763 番歌の解釈について

竹生 政資\*

## An Interpretation of the 3743th and 3763th Poems in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU

### 要 旨

万葉集 3743 番歌と 3763 番歌は、越前国に配流になった中臣朝臣宅守が都の妻にあてた歌である。いずれの歌も初句と第二句は同じで「旅といへば ことにそ易き」となっている。通説では第二句を「言にそ易き」と訓み、その意味を「(旅と言え)言葉の上では簡単なことだ」と解している。ところが、初句の「旅といへば」は「旅と言葉で言え」の意であるから、第二句の「こと」を通説のように「言」と解すると初句と重複して冗長な表現になる。また、3763 番歌の結句「ことにまさめやも」の解釈についても問題がある。本論文は、この二つの歌について、歌の語義にできるだけ忠実に即しながら、かつ歌の意味が通る新しい解釈を提案する。

#### 1. はじめに

本論文で取り上げる万葉集 3743 番歌と 3763 番歌は、万葉集巻十五の最後に掲載された中臣朝臣宅守とその妻である狭野茅上娘子の間に交わされた 63 首の贈答歌の中の 2 首である。いずれも宅守から妻にあてて詠まれた歌である。この二つの歌の骨子は「配流先での旅生活は言葉では表現できないほど辛いものである」というものであるが、後に示すように通説の解釈にはいくつか問題がある。本論文の目的は、従来の解釈を見直し、歌の語義にできるだけ忠実に即した解釈を試みることである。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう[1]。

15/3743 旅といへば 言にそ易き 少なくとも 妹に恋ひつつ すべなけなくに

【原文】多婢等伊倍婆 許等尔曾夜須伎 須久奈久毛 伊母尔恋都々 須敝奈家奈久尔

15/3763 旅といへば 言にそ易き すべもなく 苦しき旅も 言にまさめやも

【原文】多婢等伊倍婆 許登尔曾夜須伎 須敝毛奈久 久流思伎多婢毛 許等尔麻左米也母

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を 3743 番歌と 3763 番歌について出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえた

---

\*佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)  
公開鍵指紋: 11C0 DBB6 369C DB72 DD3A B122 EF6B 5B5E B99A C2E7

め内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

## ① 新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

### 《3743 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き 少なくとも 妹に恋ひつつ すべなけなくに

【現代語訳】旅と言ってしまえば簡単な言葉だが、あなたに恋い焦がれて仕方がない気持は並大抵ではないのだ。

【注釈】上二句は後出の宅守歌の三七六三に同じ。類想歌、「言に言へば耳にたやすし少なくとも心の中に我が思はなくに」（二五八一）。「少なくとも... なくに」の形は、他にも「少なくとも吾の松原清からなくに」（二一九八）、「少なくとも心の中に我が思はなくに」（二九一一）の例があり、清いこと、思うことが、並はずれていることを言う。

### 《3763 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き すべもなく 苦しき旅も 言にまさめやも

【現代語訳】旅と言ってしまえば言葉では簡単なことだ。どうしてもなく苦しい旅も、言葉ではそれ以上に勝った言い方がないのだ。

【注釈】宅守には「旅といへば言にそ易き」と嘆いた歌がもう一首ある。「旅といへば言にそ易き少なくとも妹に恋ひつつすべなけなくに」（三七四三）。三七六三の方は、八音からなる結句が句中に単独の母音を含まず、字余りの法則から外れている。原文「許等尔麻左米也母」の「母」がなければ、「言にまさめや」となって音数に叶うが、諸本に異同はない。こころ余りてことば余りたる例、と見るべきであろう。作者は、我が流罪の旅の苦しさを、世にありふれた「旅」という語でしか表現し得ないことに苛立っている。歌としては不出来でも、言語表現の宿命的欠陥に触れているところは、注目に値する。

## ② 新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

### 《3743 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き 少なくとも 妹に恋ひつつ すべなけなくに

【現代語訳】旅といえは 言葉の上ではそれだけのこと 少しだけ あなたを思って 遣る瀬ないなどという段ではないのだよ

【注釈】旅といへば言にそ易き——口で旅とだけ言うと簡単だ。概念としての旅という語には哀愁・苦悩などの実感がないことをいう。この旅は、生活の拠点である家を出て異郷に長期間滞在する意。○少なくとも——少ナクモ... ナクニは、少しばかり～だというような程度ではない、即ち、甚だしく～だ、という意を表す慣用句。→ 四一一八。

### 《3763 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き すべもなく 苦しき旅も 言にまさめやも

【現代語訳】旅といえは 言葉の上ではそれだけのこと 仕方がないほどに 苦しい旅でも 旅としか言い表しようがない

【注釈】旅といへば言にそ易き → 三七四三。○言にまさめやも——このマスはマサルに同じく、優越する意。マサメヤモは反語でマサラジと同じく、表現に忠実に解釈すれば、苦しくてたまらない現実の旅暮しが、在り来たりの抽象的概念としての「旅」という語よりも気楽だ、ということになって、

意を得ない。恐らく宅守の誤用であろう。

③ 講談社文庫（中西進）<sup>[3]</sup>

《3743 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き 少くも 妹に恋ひつつ すべ無けなくに

【現代語訳】旅のつらさにあるというだけなら、ことばは簡単だが、その上私はあなたが恋しくてひどく術ないことなのに。

【注釈】少くも妹に恋ひつつすべ無けなくに——「少くも妹に恋ひつつすべ無」いことが「なくに」。少しばかり恋するのではない意。「すべ」は施すべき術。

《3763 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き すべもなく 苦しき旅も 殊に益さめやも

【現代語訳】「旅」といってしまうと、ことばでは簡単である。「すべもなく苦しい旅」といったって、特に益さろうとも思われない。

【注釈】旅といへば言にそ易き——三七四三の再使用。○殊に益さめやも——言の重みが益さることがあろうか。

④ 萬葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[4]</sup>

《3743 番歌》

【訓読文】旅と云へば 言にぞ易き 少くも 妹に恋ひつゝ 術無けなくに

【現代語訳】旅といへば言葉の上ではやさしいことだ。しかしその旅も実際には、妹に恋ひつゝ大いに術無いことであるよ。

【注釈】旅と云へば言にぞ易き——旅と口で云へば、言葉の上ではたやすいことだ、の意で、実際にはさうでないといふ事を後の三句で述べた。

少くも妹に恋ひつゝ術無けなくに——「少くも」は下の「なくに」に応ずるので、「少くも吾の松原清からなくに」（十・二一九八）、「少くも心の中に吾が思はなくに」（十一・二五二三）などと同じく、「少くも清からなくに」「少くも思はなくに」は「大いに清いことよ」「大いに思ふことよ」の意になるやうに、「少くも術無けなくに」は「大いに術ないことよ」の意になる。今の場合「清から」「思は」でなく「術無け」と、上に否定の言葉があるので否定が重なるためにやゝこしくなるのであるが、「無け」は「無し」の未然形（一・七七）で、「術無し」といふ言葉を大いに肯定する事になる点は、他の場合と同様なのである。「少くも……なくに」といふ云ひ方が、既にやゝこしい表現であるところに、今は「なけなくに」と打消が重なったので一層やゝこしくなったのであるが、右にあげた例によつて「少くも『術無し』ではない」即ち「大いに『術無し』である」といふ事がわかつて思ふ。この作者の率直さを欠いた誇張がかうした表現になつたと見るべきである。

《3763 番歌》

【訓読文】旅と云へば 言にぞ易き 術も無く 苦しき旅も 言に益さめやも

【現代語訳】旅と云へば言葉の上では容易である。せん術も無く苦しい旅も言葉でそれ以上に言ひ得られようか。云ひ得られないことよ。

【注釈】旅と云へば言にぞ易き——既出（三七四三）。

言に益さめやも——その言葉以上に増していふ事があろうか。「や」は反語。云ふ事が出来ない、の意。

## ⑤ 日本古典文学大系<sup>5)</sup>

### 《3743 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き 少くも 妹に恋ひつつ 為方無けなくに

【現代語訳】旅と言うと言葉ではたやすく聞えるが（そんなに簡単なものではない）、旅では、妹への恋に苦しみつづけて、とても一通りのすべ（仕方）のなさではない。

【注釈】言にそ易き——ことばではたやすい。○少くも——下の否定と呼応して大いにの意となる。これを第四句にかける説もあるが、「少くも吾の松原清からなくに」（巻十、二一九八）「少くも心のうちにわが思はなくに」（巻十一、二五二三・二五八一、巻十二、二九一一）などの類型から見て、第五句にかけて解すべきである。なお「少くも年月経れば恋しけれやも」（巻十八、四一一八）もこの変型。○無けなく——無くないこと。無ケは無シの古い未然形。ナクはズのク語法。nu+aku → naku。

### 《3763 番歌》

【訓読文】旅といへば 言にそ易き 為方もなく 苦しき旅も 言に益さめやも

【現代語訳】旅と口でいうのは大したことはない。しかし何ともしようもないほど苦しい旅も、旅と言う以上にはあらかわせないものです。

【注釈】旅といへば言にそ易き——三七四三の第一・二句と同じ。○言に益さめやも——ことばでそれ以上にあらかわせようか、あらかわせない。

上に示した五つの先行研究を見ると、まず 3743 番歌については、①～⑤のすべての解釈が一致していることがわかる。一方、3763 番歌については、結句の解釈のみが異なっており、①、②、④、⑤の四つは「言に益さめやも」と解するのに対して、③だけは「殊に益さめやも」の意に解している。それ以外の点ではすべて一致している。

次の第2節では、上に示した五つの先行研究の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

## 2. 先行研究における問題点

まず 3743 番歌の問題について検討しよう。問題があるのは第二句の「ことにそやすき」である。前節の①～⑤はいずれも「言にそ易き」と訓み、「(旅と言え) 言葉の上では簡単なことだ」と解している。この解釈には少なくとも二つの問題点がある。

第一の問題点は、第二句「ことにそやすき」を通説のように「言にそ易き」と訓んだ場合、「言に」の部分と初句と重複して冗長な表現になることである。というのは、初句の「旅といへば」は「旅と言葉で言えば」の意であるから、第二句で重複して「言にそ易き」と言う必要はまったくないからである。すなわち、「旅と言葉で言えば、言葉の上でこそ簡単なことだ」という表現は歌としては冗長すぎるのである。したがって、第二句は「殊にそ易き」と訓み、「旅と言葉で言えば、格別に簡単なことだ」と解するのがよく、その根拠については次の第3節で考察する。

第二の問題点は、「言にそ易き」という表現自体の問題である。問題点をはっきりさせるために、この表現から係り結びをとり、「言に易し」という通常の表現に戻して考えよう。通説は「言に易し」を「言葉では容易である」あるいは「言葉としては容易である」の意味だとする。しかし、万葉集の「言に」という表現には「言葉では～である」や「言葉としては～である」という用法はない。このことを確かめるために、今問題の 3763 番歌と 3743 番歌を除外した上で、「言に」を含むすべての用

例を調べてみた。全部で 16 例あり、その内訳は以下のとおりである。ただし、「言にしありけり」のように強意の助詞「し」が途中に入っているものは「言にあり」と見なし、また 1174 番歌の「言にあれば」なども動詞の終止形に戻して「言にあり」として数えた。ほかの動詞についても同様である。また、東歌の 3466 番歌と 3497 番歌では「いづ＝出づ」という動詞の先頭音「い」が脱落し「づ(出)」となっているが「出づ」として数えた。

言にあり (8 件)	727、776、1132、1149、1197、1213、1774、2915 番歌
言に出づ (5 件)	2275、2432、3466、3497、4008 番歌
言に言ふ (1 件)	2581 番歌
朝言に御言問はさず (1 件)	167 番歌
伝て言に我に語らく (1 件)	4214 番歌

この結果から、いずれの例も「言に」は動詞に続いており形容詞に続く例はない。また、個別の用法を見ても、「言葉では～である」や「言葉としては～である」という用法はないことがわかる。

なお、前節の注釈①(新日本古典文学大系)は類想歌として 2581 番歌「言に言へば耳にたやすし」少なくとも心の中に我が思はなくに」の例をあげているが、「耳にたやすし」という表現があるから「言にたやすし」(したがって「言に易し」)もあって当然と考えるのは早計である。というのは、「耳」は言葉を感じとる感覚器官であるから「耳に易し」(耳にとつては易しく聞える)という表現は意味があるが、「言」は(その実体は音であり)感覚器官ではないから「言に易し」という表現自体そもそも意味をなさないからである(「言に言ふは易し」なら意味がある)。

次に、3763 番歌の問題について検討しよう。この歌にも 3743 番歌と同じく第二句の問題があるが、このほかに次の二つの問題点がある。まず第一の問題点は、結句「ことにまさめやも」の解釈である。前節の①、②、④、⑤は「言に益めやも」と訓み、「言葉ではそれ以上に勝った言い方がない」あるいは「言葉では言い表せない」などと解している。一方、③は「殊に益さめやも」と訓み、「特に言葉の重みが益すとも思われぬ」と解している。本論文の結論は後者と同じであるが、その根拠については節 3 節で述べることにして、ここでは前者の解釈の問題点を指摘しよう。実は、結句を「言に益めやも」と訓む限り、この歌が意を得ないのは、前節の注釈②(新編日本古典文学全集)が次のように告白していることから明らかである。

マサメヤモは反語でマサラジと同じく、表現に忠実に解釈すれば、苦しくてたまらない現実の旅暮しが、在り来たりの抽象的概念としての「旅」という語よりも気楽だ、ということになって、意を得ない。恐らく宅守の誤用であらう。

ここでは歌が理解できないのを作者の「誤用」のせいにしてはいるが、学者がそれを言い出したらおしまいであろう。というのは、歌の言葉というものは、日常会話のようにその場の思いつきで発せられたものではなく、入念に考え、言葉を選んで作られたものだからである。したがって、日常会話の言葉とは違い、歌の言葉に「誤用」が含まれる可能性はきわめて低い。この点、写本の「誤字」などは次元が異なる。だからこそ、約 1300 年を経た今日でも当時の歌を理解することができるのである。

さて、結句を「言に益めやも」と訓む限り歌が意を得ない理由を別の視点から考えるために、今問題の 3763 番歌を、大伴旅人の「酒をほめる歌十三首」の中の一つ、345 番歌と比較してみよう。

03/0345 <sup>あたい</sup> 価なき 宝といふとも <sup>ひとつきの</sup> 一杯の 濁れる酒に あにまさめやも  
15/3763 旅といへば 言にそ易き すべもなく 苦しき旅も 言にまさめやも

345 番歌の結句の「あに」は単に反語を強める働きをする語であるから除外すると、345 番歌の「濁れる酒にまさめやも」と 3763 番歌の「言にまさめやも」は文法構造がまったく同じであり、次のような対応関係が成立するはずである。

「値段のつけられない高価な宝」も → 「すべもなく苦しい旅」も  
「一杯の濁り酒」に → 「(旅という) 言葉」に

そこで、この対応関係を念頭において歌を解釈してみると、345 番歌の場合には、

「値段のつけられない高価な宝」も、「一杯の濁り酒」に、決して勝らないだろう  
（「一杯の濁り酒」の方がどんな「値段のつけられない高価な宝」よりも勝っている）

という内容になり、作者の気持ちが明確に伝わってくる。ところが、3763 番歌の場合には、

「すべもなく苦しい旅」も、「(旅という) 言葉」に、決して勝らないだろう  
（「(旅という) 言葉」の方がどんな「すべもなく苦しい旅」よりも勝っている）

となり、意味をなさない。すなわち、歌の結句を「言に益めやも」と訓む限り、通説が言うような「言葉ではそれ以上に勝った言い方がない」や「言葉では言い表せない」というような意味は出てこない。通説は、語義を無視して、単に文脈に合うように適当な意識を付けているにすぎないのである。

3763 番歌に関する通説の第二の問題点は、第二句の「ことに」と結句の「ことに」がまったく同じ音でありながら、何の修辞効果も生み出さない点である。前節の①、②、④、⑤の解釈では、第二句の「ことに」は「言葉の上では」の意であるのに対し、結句の「ことに」は「言葉よりも」と比較の意に解されており、二つの「ことに」という言葉が何の関連性もない独立な存在となっている。前節の③の解釈でも、第二句と結句の「ことに」は違う意味に解されており、同じ問題をかかえている。

### 3. 万葉集 3743 番歌と 3763 番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈結果を示し、その後にそれぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず 3743 番歌と 3763 番歌について訓読、直訳、意識を示す。

#### 《3743 番歌》

【訓読】旅と言へば 殊にそ易き 少なくとも 妹に恋ひつつ すべなけなくに

【直訳】「旅」と言葉で言えば、(実情に比べると) 格別に易しいものだ。少しだけ、妹に恋しながらなす術のない思いでいるわけではないのに。

【意識】「旅」と言葉で言えば、実情より格別に易しく聞えるものだ。今私が経験している「旅」は、長期間にわたり妹に逢うこともできず、はかり知れないほどに、妹に恋しながらなす術のな

い思いでいる旅なのに... 言葉では旅の苦しい実情はとても表現しきれないものだ。

《3763 番歌》

【訓読】旅と言へば 殊にそ易き すべもなく 苦しき旅も 殊に増さめやも

【直訳】「旅」と言葉で言えば、(実情に比べると) 格別に易しいものだ。「すべもなく苦しい旅」という言葉も、(ただの「旅」という言葉より「苦しさ」の度合いが) 格別に増すだろうか。

【意訳】「旅」と言葉で言えば、実情より格別に易しく聞えるものだ。本当の旅の苦しさを表現するために、「すべもなく苦しい」という修飾語を付けて「すべもなく苦しい旅」という言葉を使ってみたとところで、単なる「旅」という言葉の場合よりも、相手に伝わる「苦しさの度合い」が格別に増すだろうか... たいして増しはしない... 言葉では旅の苦しい実情はとても表現しきれないものだ。

上に示した新しい解釈のポイントは二つある。第一のポイントは、3743 番歌と 3763 番歌の第二句「ことにそやすき」を「殊にそ易き」と訓み、「格別に易しい」と解することである。第二のポイントは、3763 番歌の結句「ことにまさめやも」を「殊に増さめやも」と訓み、「格別に増すだろうか... たいして増しはしない」と解することである。後者は、第 1 節の注釈③で中西進氏がとっている解釈と同じである。このように、二つの歌の中の「ことに」をすべて「殊に」と解することにより、特に 3763 番歌において、第二句と結句の「殊に」が同じ意味、同じ発音の繰返しとして修辞効果を生み出す。実際、第二句では「殊に」が係り助詞「そ」を伴って「易し」を強調し、結句では反語表現の中で「殊に」が「増す」を強調している。

さて次に、上で述べた二つのポイントの成立根拠を示そう。まず第一のポイントについて考える。3743 番歌と 3763 番歌の第二句を「殊にそ易き」と訓むと、確かに歌の文脈にぴったり合致するが、問題はこのような表現が万葉時代に存在したかどうかである。まず、「ことに＝殊に、格別に」という副詞の表現が存在したことは、次の歌から明らかである。

07/1314 椽つるはみの 解き洗ひ衣の 怪あやしくも ことに着欲しき (殊欲服) この夕ゆうべかも

この歌の第三句は「格別に着たいと思う (この夕べだなあ)」という意味である。次に、「殊にそ易き」のように「～に」という語形の副詞が、その直後に係助詞「そ」をとる例があるかどうかである。これについても次の例を示すことができる。

03/0476 わが大君 天知らさむと 思はねば おほにそ見ける 和東わづかそまやま 山

18/4049 おろかにそ 我は思ひし 乎布をふの浦の 荒磯ありそのめぐり 見れど飽かずけり

次に、第二のポイントについて考えよう。新しい解釈では、結句の訓み方を従来の「言に益さめやも」から「殊に増さめやも」に変更しているので、前節で指摘したような問題点 (345 番歌と 3763 番歌の比較検討から生じる問題点) は生じない。ただし、「増す」という語は「～が... よりも増す」という比較の意味を含んだ表現であるから、何に比べて何が増すのかをはっきりさせる必要がある。そこで、改めて歌の骨子を見ると、

「旅」という言葉は格別に易しい。「すべもなく苦しい旅」という言葉も「...」に比べて、格別に「...」が増すことがあろうか... たいして増しはしない。

という内容になっている。この中の二つの「...」の部分は文脈から推測して補う必要がある。作者の気持ちを推測すると、この作者は、単なる「旅」という言葉だけでは今の自分の苦しさを相手に伝えることができないので、「すべもなく苦しい」という修飾語を追加して「すべもなく苦しい旅」という言葉を作り、単なる「旅」という言葉と「すべもなく苦しい旅」という言葉を比較し、後者が前者に対してどれだけ「今の自分の苦しき」を表現する効果が増すかを考えた上で、その結論を述べたのが 3763 番歌だと思われる。だとすれば、上に示した歌の骨子の中で省略された二つの「...」は、歌の文脈から次のように推測することができるだろう。

「旅」という言葉は格別に易しい。「すべもなく苦しい旅」という言葉も、単なる「旅」という言葉に比べて、格別に「今の自分の苦しき」を表す効果が増すことがあろうか... たいして増しはしない。

以上の考察結果をすべて考慮に入れて歌を解釈したのが、この節の初めに示した直訳と意識である。解釈結果だけを見れば、3743 番歌も 3763 番歌も、いずれも「今の旅の苦しきはとても言葉では表せない」という内容であり、これ自体は歌の雰囲気から容易に推測できるものである。実際、通説もこのような意味に解しており、歌の心を読み誤っているわけではない。しかしながら、本論文では、できる限り歌の語義に忠実に即しながら、かつ作者の心を正確に読み取ることを目的とした。

#### 4. おわりに

本論文では、万葉集3743番歌と3763番歌の解釈について再検討を行い、以下の二つの結論を得た。第一に、それぞれの歌の第二句の「ことにそやすき」は、通説では「言にそ易き」と訓まれているが、これを「殊にそ易き」と訓み改めること。第二に、3763番歌の結句「ことにまさめやも」は、通説では「言に勝さめやも」と訓まれているが、これも「殊に増さめやも」と訓み改めること。このように訓み改めることにより、歌の意味が明確となり、作者の意図も正確に理解できるようになる。また、3763番歌において、第二句の「殊に」と結句の「殊に」が同音の繰返しによる修辞効果を生む。本論文で示したような結論が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

#### 参考文献

- [1] 「萬葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.456、p.462、2002 年。
- [2] 「萬葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、p.71、p.77、1996 年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注 (三)」、中西進、講談社文庫、p.336、p.340、1980 年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第十五」、澤瀉久孝、中央公論社、p.153-154、p.167、1965 年。
- [5] 「萬葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.100-101、pp.104-105、1962 年。